

二〇二五年度

普連土学園中学校 入学試験問題

二〇二五年 二月一日実施

国語

一日午前四科

- 一、問題に答える時間は六十分です。
- 二、問題は、問題一 問題五 まであります。
- 三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。
- 四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一

次の文章を読み、後の問に答えなさい。なお、設問の都合上、表記を改めたところがあります。

昨今、「正しさは人それぞれ」とか「みんなちがってみんないい」といった言葉や、「現代社会では価値観が多様化している」「価値観が違う人とは結局のところわかりあえない」といった言葉が流布しています。このような、「人や文化によって価値観が異なり、それぞれの価値観には優劣がつけられない」という考え方を相対主義といいます。「正しさは人それぞれ」ならまだしも、「絶対正しいことなんてない」とか、「何が正しいかなんて誰にも決められない」といったことさえ主張する人もけっこういます。

こうしたことを主張する人たちは、おそらく多様な他者や他文化を尊重しようと思っっているのでしょう。そういう善意はよいものではありますが、はたして「正しさは人それぞれ」や「みんなちがってみんないい」という主張は、本当に多様な他者を尊重することにつながるのでしょうか。そもそも、「正しさ」を各人が勝手に決めてよいものなのか。それに、人間は本当にそれほど違っているのかも疑問です。

a、価値観の異なる人と接触することがなかったり、異なっているにもかかわらず両立できるような価値観の場合には、「正しさは人それぞれ」と言っているにも大きな問題は生じません。たとえば、訪ねることも難しい国の人たちがどのような価値観によって生活しているか、自分には関係がありません。またたとえば、野球が好きな人とサッカーが好きな人は、スポーツのネタでは話が合わないかもしれませんが、好きなスポーツの話さえしなければ仲良くできるでしょう。サッカーが好きな人は間違っていて、すべての人は野球が好きでなければならない、なんていうことはありません。

① こうした場面では、「人それぞれ」「みんなちがってみんないい」でよいでしょう。しかし、世の中には、両立しない意見の中から、どうにかして一つに決めなければならない場合があります。b、「日本の経済発展のためには原子力発電所が必要だ」という意見と、「事故が起こった場合の被害が大きすぎるので、原子力発電所は廃止すべきだ」という意見とは、両立しません。どちらの意見にもつとめ点があるかもしれませんが、日本全体の方針を決めるときには、どちらか一つを選ばなければなりません。原子力発電所を維持するのであれば、廃止した場合のメリットは捨てなければなりません。逆もまたしかり。「みんなちがってみんないい」というわけにはいかないのです。

そんなときには、どうすればよいでしょうか。「価値観が違う人とはわかりあえない」のであれば、どうすればよいのでしょうか。

② そうした場合、現実の世界では権力を持つ人の考えが通ってしまいます。本来、政治とは、意見や利害が対立したときに妥協点や合意点を見つけたすためのはたらきなのですが、最近では、日本でもアメリカでもその他の国々でも、権力者が力任せに自分の考えを実行に移すことが増えていきます。批判に対してきちんと正面から答えず、単に自分の考えを何度も繰り返したり、論点をずらしてはぐらかしたり、権力を振りかざして脅したりします。

そうした態度を批判するつもりで「正しさは人それぞれだ」とか「みんなちがってみんないい」などと主張したら、権力者は大喜びでしょう。なぜなら、もしもさまざまな意見が「みんなちがってみんないい」のであれば、つまり③「さまざまな意見の正しさに差がないとするなら、選択は力任せに行うしかないからです」「絶対正しいことなんてない」とか「何が正しいかなんて誰にも決められない」というのであればなおさらです。決定は正しさにもとづいてではなく、人それぞれの主観的な信念にもとづいて行うしかない。それに納得できない人とは話し合っても無駄だから権力で強制するしかない。こういうことになってしまいます。

つまり、「正しさは人それぞれ」や「みんなちがってみんないい」といった主張は、多様性を尊重するどころか、異なる見解を、権力者の主観によって力任せに切り捨てることを正当化することにつながってしまうのです。これでは結局、「力こそが正義」という、困った世の中になってしまいます。それは、権力など持たない大多数の人々（おそらく、この本を読んでいるみなさんの大部分）の意見が無視される社会です。

では、どうしたらよいのでしょうか。

④ よくある答えは、「科学的に判断するべきだ」ということです。科学は、「客観的に正しい答え」を教えてくれると多くの人は考えています。このように、さまざまな問題について「客観的で正しい答えがある」という考え方を、普遍主義といえます。探偵マンガの主人公風に言えば、「真実は一つ」という考え方だといってもよいかもしれません。先ほどの相対主義と反対の意味の言葉です。「価値観が多様化している」と主張する人たちでも、科学については普遍主義的な考えを持っている人が多いでしょう。「科学は人それぞれ」などという言葉はほとんど聞くことがありません。

そして実際、日本を含めてほとんどの国の政府は、政策を決めるにあたって科学者の意見を聞くための機関や制度を持つ

ています。日本であれば、各省庁の審議会（専門家の委員会）や日本学術会議などです。「日本の経済発展のために原子力発電所は必要なのか」「どれぐらいの確率で事故が起こるのか、事故が起こったらどれぐらいの被害が出るのか」といった問題について、科学者たちは「客観的で正しい答え」を教えてください、そうに思えます。

c、実は科学は一枚岩ではないのです。科学者の中にも、さまざまな立場や説を取っている人がいます。そうした多数の科学者が論争する中で、「より正しいような答え」を決めていくのが科学なのです。それゆえ、「科学者であればほぼ全員が賛成している答え」ができあがるには時間がかかります。みなさんが中学や高校で習うニュートン物理学は、いまから三〇〇年以上も昔の一七世紀末に提唱されたものです。アインシュタインの相対性理論や量子力学は「現代物理学」と言われますが、提唱されたのは一〇〇年前（二〇世紀初頭）です。現在の物理学では、相対性理論と量子力学を統一する理論が探求されていますが、それについては合意がなされていません。合意がなされていないからこそ、研究が進められているのです。

最先端の研究をしている科学者は、それぞれ自分が正しいと考える仮説を正当化するために、実験をしたり計算をしたりしています。つまり、科学者に「客観的で正しい答え」を聞いても、何十年も前に合意が形成されて研究が終了した（^{りよう}）ことについては教えてくれますが、まさしく^⑤今現在問題になっていることについては、「自分が正しいと考える答え」しか教えてくれないのです。ある意味では、「科学は人それぞれ」なのです。

そこで、たくさんの科学者の中から、自分の意見と一致する立場をとっている科学者だけを集めることが可能になります。東日本大震災で福島第一原発が爆発事故を起こす前までは、日本政府は「原子力推進派」の学者の意見ばかりを聞いていました（最近また、そういう時代に逆戻りしつつあるような気がします）。アメリカでも、トランプ大統領（在任二〇一七、二〇二二）は地球温暖化に懐疑的な学者ばかりを集めて「地球温暖化はウソだ」と主張し、経済活動を優先するために二酸化炭素の排出の規制を緩和しました。

権力を持つ人たちは、^⑥もっと直接的に科学者をコントロールすることもできます。現代社会において科学研究の主要な財源は国家予算です。そこで、政府の立場と一致する主張をしている科学者には研究予算を支給し、そうでない科学者には支給しないようにすれば、政府の立場を補強するような研究ばかりが行われることになりかねません。

このように考えてみると、科学者であっても、現時点で問題になっているような事柄（^{がら}）について、「客観的で正しい答え」

を教えてください。それはなさそうです。ではどうしたらよいのでしょうか。自分の頭で考える？　どうやって？

この本では、「正しさ」とは何か、それはどのようにして作られていくものなのかを考えます。そうした考察を踏まえて、多様な他者と理解し合うためにはどうすればよいのかについて考えます。ここであらかじめ結論だけ述べておけば、私は、「正しさは人それぞれ」でも「真実は一つ」でもなく、人間の生物学的特性を前提としながら、人間と世界の関係や人間同士の間の関係の中で、いわば共同作業によって「正しさ」というものが作られていくのだと考えています。それゆえ、多様な他者と理解し合うということは、かれらとともに「正しさ」を作っていくということです。

これは、「正しさは人それぞれ」とか「みんなちがってみんないい」といったお決まりの簡便な一言を吐けば済んでしまうような安易な道ではありません。⑦これらの言葉は、言ってみれば相手と関わらないで済ますための*最後通牒です。みなさんが意見を異にする人と話し合った結果、「結局、わかりあえないな」と思ったときに、このように言うでしょう。「まあ、人それぞれだからね」。対話はここで終了です。

ともに「正しさ」を作っていくということは、そこで終了せずに踏みとどまり、とことん相手と付き合うという面倒な作業です。相手の言い分を受け入れて自分の考えを変えなければならぬこともあるでしょう。それでプライドが傷つくかもしれない。しかし、傷つくことを嫌がっているのは、新たな「正しさ」を知って成長していくことはできません。

最近、「正しさは人それぞれ」と並んで、「どんなことでも感じ方したい」とか「心を傷つけてはいけない」といった感情尊重の風潮も広まっています。しかし、学び成長するとは、今の自分を否定して、今の自分でないものになるということです。これはたいへんに苦しい、ときに心の傷つく作業です。あえていえば、成長するためには傷ついてナンボです。若いみなさんには、傷つくことを恐れずに成長の道を進んでほしいと思います（などと言うのは説教くさくて気が引けますが）。

（山口　裕之『みんな違ってみんないい』のか？　相対主義と普遍主義の問題』　ちくまプリマー新書）

〔注〕*最後通牒……一般に国家間の紛争の場合の交渉相手に対する最後の通告のことで、これを相手が受け入れない場合は交渉打ち切りとなり、軍事的な実力行使に出ることを意味する。

問一 文中の a c に入る最も適当な語を次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア そのうえ イ たしかに ウ ですから エ ところが オ たとえば

問二 —— 線部①「こうした場面」とありますが、これはどのような状況ききょうのことですか。「状況」に続くようにして答えなさい。

問三 —— 線部②「そうした場合」とありますが、それはどのような場合ですか。本文中から抜き出し、初めと終わりの三文字つを答えなさい。

問四 —— 線部③「さまざまな意見の正しさに差がないとするなら、選択は力任せに行うしかない」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 「みんなちがつてみんないい」という見方に立てば、意見の異なる人と無駄な話し合いを繰り返さなければならないので、決定を権力者に委ねた方が面倒がなくなること。

イ 「みんなちがつてみんないい」のであれば、権力者の主観も全て「正しい」ということになるので、権力者の信念に基づいた決定にみんなが素直に従うということ。

ウ 「みんなちがつてみんないい」という主張は実は多様性を尊重していないので、多様ではない一部の人の主観による決定を後押しすることになるということ。

エ 「みんなちがつてみんないい」ことで自分の主張を誰一人曲げない中では、力任せの選択こそが唯一ゆいの決定法にならざるを得ないということ。

オ もし「みんなちがつてみんないい」とすると、多くの人に認められる一つの「正しさ」は存在しないことになり、「正しさ」によらずに強引に決定するしかなくなるということ。

問五 —— 線部④「よくある答えは、『科学的に判断すべきだ』ということ」とありますが、このように答える人は、なぜ「科学的に判断すべきだ」と考えるのですか。答えなさい。

問六 —— 線部⑤「今現在問題になっていることについては、『自分が正しいと考える答え』しか教えてくれない」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問七 ——線部⑥「もつと直接的に科学者をコントロールすることもできます」とありますが、これは具体的にどのようなことですか、説明しなさい。

問八 ——線部⑦「これらの言葉は、言ってみれば相手と関わらないで済ますための最後通牒です」とありますが、それはどのようなことですか。説明しなさい。

問九 この文章において、筆者は「正しさ」を作っていくことにはどのような意味があると考えていますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 「正しさは人それぞれ」や「みんながってみんないい」といったお決まりの一言で済ますのではなく、多様な他者と相互理解を深め、共同作業によって「正しさ」を作っていくことこそが、本当の意味で多様な他者を尊重することにつながるということ。

イ どれ程苦しく、心が傷ついたとしても、そのことがいつそう自分を成長させてくれるのだから、人間と世界、人間同士の関係の中で「正しさ」を作っているって積極的に傷つく経験を重ねることこそが、自分を成長させる唯一の道であるということ。

ウ たとえ客観的で正しい答えというものが無かったとしても、「正しさは人それぞれ」や「みんながってみんないい」としてしまいうのではなく、共同作業で苦しみながら「正しさ」を作っていくことによって、人は成長することができるということ。

エ 科学が「より正しそうな答え」にたどりつくには時間がかかるからと「正しさは人それぞれ」や「みんながってみんないい」といった安易な道に進むのではなく、まずはみんな「正しさ」を作っていくようにすれば、納得できる「正しさ」を得られるのだということ。

オ 「正しさは人それぞれ」や「みんながってみんないい」と考えると他者を尊重するどころか権力者を喜ばせることになってしまうので、ともに「正しさ」を作り、自分を成長させることで、不当な権力の正当化を防ぐことになるということ。

問題二

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

女子高生の綾は、やりたいことが見つからず、進路調査票を担任に提出することもできずに、両親にも心配されていた。雨宿りに入った公民館でより子さんの菱刺し工房を知った綾は、めずらしく自分から行動を起こして、工房に行ってみることにした。

*菱刺しのやり方を一言で説明するなら「数えて刺す」。単純明快な作業だ。

糸を引き抜く時、布と擦れ合うわずかな感触が心地よい。糸が布目を通るささやかでも確かな感触は、よいいぞその調子、と背中を押してくれているような気がする。

縦糸を二本またぎ、針を刺して、裏に出た針を今度は縦糸六本またいで表に針を出す。端まで行ったら、*コングレスを回転させてまた、左へ向かって進む。

次の目に移る前に、刺した場所が正しいか調べ、確かにあたしは正しかったと確証を得て、安堵と充実感を覚え次の目に進む。目の数だけ、いちいち安堵と充実感が繰り返される。よしよし。いい調子だ。

「時々、コングレスを揉んで、糸を馴染ませるといいよ」と石田さんがアドバイスをくれる。

二段三段と模様ができていく。刺して糸を引き抜く。

安らぐ。ミシンの音と庭木の梢が揺れる音と鳥の声が聞こえているのだが、耳を澄ますと、糸が布の目を通る音までも聞こえてきそう。

一つクリア、二つクリア、と一步一步着実に進んでいるのが目で見て分かる。

裏から刺す時、何度か変なところから針がひよっこり出てしまった。

より子さんたちは訳なく刺している。長くやっているのと、透視能力に目覚めるのかもしれない。

初めはおそろおそろ慎重に刺していたが、だんだん速くなってきた。

四、八、六、二……。

指の先にズキリと痛みが走った。

「いつ」

手を素早く引く。爪の間を突いてしまった。

「どうしたの？」

「刺した？」

田向井さんと石田さんがすぐに氣遣つてくれる。

「大丈夫です」

布を点検する。よかった、汚さずにすんだ。

指をしげしげと見て、何ともないのを確認する。

① 自分の指を見ていると、なぜか父の指と重なった。

小学校三、四年生の頃だったと思う。ゴールデンウィークに父が単身赴任先から帰ってきていた。

母は農機具屋のイベントで留守にしていた、父とあたしで留守番だった。

友だちはキャンプに行くとか旅行に行くとかはしゃいでいたけど、武田家はそんなことは一切ない。あたしも別にキャンプにも旅行にも興味はなかったし家でごろごろしていられればそれでよかった。

ところが、残念なことに、父が家にいるのである。父つきの家にいるくらいならキャンプだろうと旅行だろうと行ってもいい気がしていた。

何しろ父は、背筋を伸ばしてNHKの囲碁対局を鑑賞し、生真面目な顔で民放のサイコロを転がしてトークをする番組を見ているのである。どうやってくつろげというのか。お父さんはあちこちの単身赴任先で、リラックスすることや笑顔なんかを落つことしてきたに違いないと思った。

リビングで寝転がってテレビでも見ようものなら、「勉強はどうした」「塾も考えなきゃな」などとこの世で一番不愉快な言葉を放つのである。^(a) 始末に負えない。

ゴールデンウィーク初日の昼食は父が作るようになった。母は、よかったねお父さんが作ってくれるって、と絶望的なことを言い残して仕事に出かけてしまった。

渋々エプロンを受け取る。後ろをボタンで留めるタイプだが、そのボタンが取れそうだ。

「残念。これじゃあ、エプロンはつけれないね。エプロンがつかれないなら、お手伝いはできないね」

私は嬉しさを押し殺して精一杯渋面をこしらえた。学習発表会では、この特技を生かし、岩の役をやったのだ。人前に出ることが恥ずかしすぎて逆に頬が緩むのを堪えた表情が、どう見ても気難しがり屋の岩にしか見えなかったと絶賛されたという実績がある。

「直す暇がなかったんだろう。直せばいいんだ。裁縫道具を持ってきたさい」

「あたしできないよ。お父さんは、できるの？」

「できる。向こうで一人暮らししているんだ。なんだってできるようになる」

そっか。お父さんは料理もボタンつけもやれるんだ。少し見直した——のは、ボタンをつけ始めるまで。

父の不器用偏差値の認識が甘かったと反省し、父は「できる」と言ったが「まともにできる」とは言わなかったのを、私は父が指に針を三回刺したところで思い出すことになる。

母の裁縫道具は、えんじ色のクッキー缶に入っていた。真ん中に白い帽子をかぶった女の子がおすまし顔で横を向いている絵が描かれている。糸が通っている針が数本あった。

父はエプロンからボタンをむしり取った。ハサミは使わなかった。もしかしたら使えなかったのかもしれないが深く追及することは避けた。

ボタンをあてがって、生地の中から刺す。ボタンの穴ではないところを突いたよう何度かガツガツと刺していた。穴から針が出てくるのが先か、父のこめかみの太い血管がブチ切れるのが先か静かに見比べていると、ボタンの穴から針の先がヒョコツと出た。

「出た！」

万感の思いが込み上げる、と言えばそれは大袈裟になるが、嬉しくて感動した。大変よく頑張ったと思う。父のこめかみの膨らみもすばむ。

引き抜いた表から穴に刺し、再び裏へ貫こうとした時。

「いつ」

父は指を刺した。父はあたしと違って、指をくわえるのではなく、ティッシュで押さえた。あたしは救急箱から絆創膏を取って渡す。父は粘着テープの剥離紙を剥いだ^はが、指に巻きつけようとして粘着面同士をくっつけてしまつてどうにもできなくなり、絆創膏の一枚を無駄にした。父は不器用なのだ。

あたしは新たな絆創膏を用意して、父の指に巻いてあげた。すまない、と父が言う。あたしは、こういうこともあるよ、と慰めた。こういうこともある、というほど稀な頻度であるかのようなあたしの慰めが、いかに⑤場当たり的だったか明らかになるのは、早かった。再開一投目でまた刺したからだ。

あたしは手当てをする。

「お父さん、いつもやってるの？」

「そうだ。Yシャツのボタンをよくつけ直している」

あたしが聞いたのは、いつもこんなに指に刺しているのかということだったが、考えてみればわざわざ聞くまでもないのだ。

そういえば、Yシャツのボタンの周りに小さな茶色いしみが点々と残っているのを見たことがあつた。その根性跡^{こんじょうあと}も、ネクタイを締めてしまえば見えなくなる。

父はどうかボタンをつけ終えた。

ボタンはギチギチにつけられていて、ボタンホールに引っかけにくい。あたしがボタンホールになかなか引っかけられないでいるのを見た父が、不器用だな、と呆れて留めてくれた。

…… 中略 ……

血が出ていない自分の指を見て、すっかり忘れていた出来事を思い出した。

あの時の父の指は関節が目立たず、青白い皮膚にまばらに生えている毛が目立ち、爪は神経質にカリカリに切られていた。あたしの手とは全然違うのに、どこがどうというわけではないが、似ている。しようがないよな親子だもん。

今度は注意深く裏から針を刺し、糸をしゅるしゅると引き出す。コングレスの布の目にしごかれて細くなつて出てきた糸は、引き出されるとふつくと膨らむ。その様子は、糸が呼吸をしているようにも見える。

刺し終わりは、裏返して、刺した糸の上をなぞって四目刺し戻り、糸を切る。
海のべこが一つできあがった。

頭の中のモヤモヤしている物はいくら考えても見えてこないが、これは、刺せば刺しただけ成果が見える。

「おろお、上手だことお」

「え、あ。ありがとうございます。不器用でもできるんですね」

「なも、器用不器用は関係ねのせ。目ば数えればできる」

より子さんが気さくに言ってくれる。

コンGRESをひっくり返すと、表の模様がそっくり反転されていた。

「裏もきれいで、こっちが表って言われてもわかりませんね」

感心していると、より子さんは、んだべ、とどこかいたずらが成功した子どものようににんまりし、田向井さんは丸くて小さな鼻を高くし、石田さんは吊り目を細めて頷いた。

あたしの菱刺しは、みんなのと比べるとちよつときこちなさが見える。糸がしつくりきてなくて、微妙びみょうに上に向いたり下に寄ったり、隙間すきもある。整然と並んだ布の目に刺しているのに不思議だ。

田向井さんの菱刺しは糸が詰まって隙間がなく、豊かな感じがする。石田さんのは、とてもお行儀ぎがよく、ピシッと整っている。あたしもああいふうに作れるようになりたい。

ボーン、という時計の音が空気を震ふるわせた。壁時計かべの針が三時を指している。

二時間、あつという間だ。② 気分が妙にスッキリしていた。

…… 中略 ……

「これどうしたの？」

母が、* 蒔ふきのアンゼリ力を見て当然の質問をしてきた。

「もらった」

菱刺し工房に行ったと明かした。

嘘うそをつきたくなかったのは、菱刺しや、より子さんたちを裏切りたくなかったからだ。

案の定、母は眉間にしわを寄せた。

「あゝあ。そんなことしてる場合じゃないでしょ。進路も決めてないのにフラフラ遊んで」説教を長引かせたくないので反論せず、進路も決めるし勉強もすると約束する。

すると、母の眉間からしわが消えた。

「何、どうしたの。今日はやけに素直ね」

「まあね」

露のアンゼリカは夕飯のあとに出された。

母に言われてお茶を用意しようと湯飲み茶碗を食器棚から取った時、ふと、食器棚の隅に目が行った。お客さんが来た時だけ使う、茶碗の下に敷くお皿がある。

あたしを釘づけにしたのは、お皿の下からはみ出ている布。

引き出してみると、菱刺しのコースターだ。三枚ある。生成りの麻布に、ごく薄い緑色で、模様はあたしが今取り組んでいるのと似ている。べこの鞍だ。でもこれは、六角形の亀甲模様に囲まれていない。

このコースター、見覚えがあるような、ないような。どつから来たんだろう。誰かのお土産か結婚式の引き出物か、その辺りだろうか。

そのコースターに湯飲み茶碗をのつけて出すと、父にも見覚えがあるのかそれとも、単に娘がうつつを抜かしている菱刺しだからか、じつと見下ろし沈黙。

母は、あらそのコースターどつから来たんだつと首を傾げたが、思い出せないらしく、そのままにしてアンゼリカの出所のほうに話を変えた。

菱刺し工房のお土産と聞いて、父はムツとした。手をつけず、お茶だけをすすする。

「おいしいよ、そうやって睨んでたら、お砂糖がガッチガチに固まっちゃうよ。食べてみなさいよ」すでに味見ずみの母が、勧める。

「進路は決まったのか」

父は③アンゼリカのわだかまりをあたしに向けてきた。

菱刺しをやる暇があるのかと非難したいのだな。決めようと思っていたのにそういうことを言われると腹が立つ。
「決まってるじゃないけど。別に悪いことしてるんじゃないじゃん。伝統工芸だよ。学習の一環として捉えられないかな」
「ダメだとは言っていない。やることをやってからだと言っているんだ」

④ あ、そうなのか、と思ったが、一応、もう一押ししておこう。

「だから、こういうのやつてるうちに進路が見つかるかもしれないのに、ガツガツの頭してると……」

父が湯飲みを置いた。コースターの上に置いたため、どつという重たい音を発する。その音があたしの耳の奥を打つ。心臓まで伝わった気がする。

眼鏡は蛍光灯の光を受けて真っ白。

父は席を立て部屋を出ていった。

母は、寝室のドアが閉まる音を聞くと、湯飲み茶碗にため息をつく。

「お父さん、今大変だからねえ」

「え？」

「上司の人が代わったら、少し厄介な人らしくて、こうね、揚げ足を取ったり、前と言っていることが違ったり、変化球的な要求を突きつけてきたりするらしいの。お父さん、カタブツでしょう？ 柔軟に対応するのがなかなかできないようで苦労してるみたい」

「そうなの？」

「機嫌を損ねでもしたら、リストラ候補に拔擢されるのよ」

拔擢という華々しい言葉が適切かどうかはさておき、おとなの世界って嫌だなと気持ちが沈む。

…… 中略 ……

「より子さんは何がきっかけで始めたんですか？」

「服のおつくりだな。おはじきだのあやとりだのと同じく、遊びの延長でやったもんだ。友だち集めてさ。私も最初は裏から刺すのが苦手での。布っこば持ち上げて覗き込んで刺したもんだ。別なこと考えながら刺して妙な形さなるのはしょっちゅうだった。だども、何べんもやり直しできる。気楽に失敗できたんだ。家族の着物っこさ刺してせ、喜んでもらえるの

は嬉しかったねえ」

「へえ。着てくれましたか？」

「ん。上手でねかったもな。我だって、子どもや孫が、我のために菱刺ししてければ、どんな物でも嬉しいもんだよ」
より子さんは、好物を食べたみたいな顔をして目を閉じた。

「アッパは擦り切れるまで着てけだもんで、我は大満足だったし、友だちともおしゃべりしながら刺すのは本当に楽しかったねえ」

アッパとは、母親のことらしい。父親のことはダダと呼んだそうだ。菱刺しは貧しく苦しい生活のせいで、やむなく刺したというような仄暗い印象があつたけど、こうして實際刺したり、より子さんの表情を目の当たりにしていると、そればかりじゃなかったのかもしれないと思えてくる。

確か、田向井さんは「おいしい物をずーっと食べていたいような感じ」とたえていた。それはある。加えて、菱刺しは単なる針仕事ってわけじゃない。家族や大切な人に温かな着物を着せたい。どうせなら色や柄を楽しみたい。そういう想いがある。

だからか。だから⑤菱刺しをやっている間じゅう、満たされているのか。

それなのに。

お父さん、パワハラ——。

ガッチガチの頭してると——。

あの時の父の顔が目に見え浮かぶ。

いつも通り表情はほぼ動かなかった。だからこそ、うろたえているのが透けて見えてしまった。

父と似ている指先を見る。針で突いた時の痛みを覚えていた。

何も知らない癖に、あたしは頭に浮かんだ言葉をそのまま吐いたのだ。スマホの予測変換で出てきた言葉をろくに意味も分かんずにそれらしいからと反射的に使うみたいに。あたしはスマホじゃなく、人間のはずなのに。父がどう思うかなんて考えちゃいなかった。

とはいえ、改めて謝るのもなあ。他人相手ならできることが、親だとなぜか難しくなる。

視線をさまよわせたあたしの目を引き寄せたのは――。

「より子さん、⑥そこに飾^{かざ}つてあるような財布とかバッグのような目の細かい布に刺す方法を教えてください」

コングレスを、本来刺したい生地にあてがってその上から一緒に刺^{しよ}す方法を教わった。

要するに目の粗^{あら}い布を目印にするのだ。

刺し終わったらコングレスの糸を切つて一本一本引き抜くと、生地に残るという寸法だ。

ワンポイントの模様はその夜のうちにできあがった。

ハサミを置くと、ゴツツと大きな音が出た。静かで慎重^{つし}深い菱刺しの時間がぶつりと断ち切られる。

改めて持ち上げて、ハサミが机の上ののつてから手を放してみる。音はせず、時間はつながり、余韻^{いん}が残った。あたしは通学用のリュックを引き寄せ、進路調査票を取り出した。テーブルの上の菱刺しの道具を脇^{わき}に寄せ、調査票の折り目を丁寧^{ねい}に伸ばす。

翌朝。

「お父さん、これ」

洗面所で出勤準備をしている父に、昨夜完成させた菱刺^{ほしこ}しを施したネクタイを渡す。

父は鉄製であるかのような堅牢^{けんろう}な眼鏡を押し上げて、まじまじとネクタイを見た。相変わらず鉄壁^{てき}の無表情だ。

「気に入らなかつたら、無理にしておかなくていいから。それから、あたし、八戸の工業大学で伝統デザイン勉強しようと思う。進路調査票にはそう書くつもり」

宣言すると、洗面所を出た。

父は締めてくれるような気がした。残念なことに、あたしと父は似ているから、あたしの前では一生締めないだろうけど。藍色^{あい}のネクタイに刺した模様は、海のべこだ。^{*}ネクタイの剣先^{けん}に刺した。淡い水色^{あわ}の亀甲模様とくすんだピンク色のべこの鞍。かわいい。マーサさんの見本ではシックに見えたが、色遣いによってポップにもなるらしい。新発見だ。模様と色の組み合わせは無限だから、この菱刺しという物、一生飽^あきずに続けられそう。

厄介な上司はきつとネクタイに気づくだろう。揚げ足を取るような人なら見逃^{のが}すはずがない。父とのギャップに驚^{おどろ}き、話

を振るだろう。笑うかもしれない。

⑦娘はできることはしました。あとはお父さん次第です。

結果を言えば、帰宅した父はスーツのまま、背筋を伸ばし無表情であたしと母の前を無意味に往復した。寝室に行ったあと、⑧あたしと母は顔を見合わせ、ほくそ笑んだ。

(高森 美由紀『藍色ちくちく——魔女の菱刺し工房』 中央公論新社)

〈注〉*菱刺し……青森県南部地方に伝わる、目の粗い布に糸を刺していく、刺し子と呼ばれる伝統的技法の一つ。元々は補強や

防寒のためのものであったが、今ではデザイン性が着目されている。

*コングレス……麻よりやわらかく、目がはつきりとしていて数えやすい、刺し子に向いた生地的一种。

*蒔のアンゼリカ……シベリアなどを原産地とするセリ科のハーブを蜜煮にしたアンゼリカの代用として、蒔を甘露煮にしたものこと。

*ネクタイの剣先……ここではネクタイの太い方の端のこと。

問一 〓 線部a 「始末に負えない」・b 「場当たり」の文中での意味としてもつとも適当なものを後のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① 「始末に負えない」

- ア 役に立たないということ
- イ とても腹立たしいということ
- ウ どうでもいいということ
- エ 痛いほどわかるということ
- オ どうしようもないということ

② 「場当たり」

- ア その場だけでの思いつきのこと
- イ その場にびつたりの考えのこと
- ウ その場にふさわしくない行動のこと
- エ その場の空気を変えるひと言のこと
- オ その場をうまく収める対応のこと

問二 〓 線部① 「自分の指を見ていると、なぜか父の指と重なった」とありますが、「自分の指」を見て「父の指」が連想されるのは「あたし」と「父」にどのような共通性があるからだと考えられますか。本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問三 〓 線部② 「気分が妙にスツキリしていた」とありますが、頭の中がモヤモヤしていた「あたし」がなぜ「スツキリ」した気分になつていたのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の言葉にいちいちみんなが反応してくれて、菱刺しの仲間として受け入れられたように思えたから。
- イ 刺した分だけ成果が見える菱刺しの作業に夢中になり、集中したことで、余計なことが気にならなくなったから。
- ウ より子さんに褒められたことで、不器用な自分でも不器用なりに菱刺しを楽しむことができる気がついたから。
- エ 菱刺しには刺す人の個性があらわれることを知り、菱刺しの奥深さをあらためて感じるようになったから。
- オ 時間があつという間に過ぎたことで、自分が菱刺しに集中することができていたという満足感を得られたから。

問四——線部③「アンゼリカのわだかまり」とありますが、これは「父」のどのような思いのことですか。答えなさい。

問五——線部④「あ、そうなのか、と思った」とありますが、「あたし」は何に気づいたのですか。答えなさい。

問六——線部⑤「菱刺しをやっている間じゅう、満たされている」とありますが、それはなぜですか。答えなさい。

問七——線部⑥「そこに飾ってあるような財布とかバッグのような目の細かい布に刺す方法を教えてください」とありますが、「あたし」が「目の細かい布に刺す方法」を教えてもらおうとしたのはなぜですか。答えなさい。

問八——線部⑦「娘はできることはしました」とありますが、「あたし」は何をしたというのですか。次のア～オから最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 父が苦手な上司と円滑なコミュニケーションをとれるように、上司に密かに働きかけたということ。

イ 厄介な上司への対応に苦勞する父に、上司との関わりを改善するきっかけを提供したということ。

ウ 職場で難しい立場に立たされた父が仕事に専念できるように、心配していた進路を決めたということ。

エ 父のリストラを考えているらしい上司に、無骨で堅物の父を認めるきっかけを与えたということ。

オ 菱刺しを見て話を振ってくるであろう上司に、鉄壁の無表情で笑いをとれるよう仕向けたということ。

問九——線部⑧「あたしと母は顔を見合わせ、ほくそ笑んだ」とありますが、「あたし」と「母」が喜び、満足を感じたのはなぜですか。説明しなさい。

問題三

次の①～⑩の――線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

- ① 日本の山岳上部にはシンヨウジュが分布している。
- ② なんとか彼の協力を得られるように懸命にクドク。
- ③ 世界的に有名な絵画作品を集めたテンラン会が話題だ。
- ④ それまで自分の発想にはなかったキチヨウな意見をもらった。
- ⑤ 夕暮れの空がきれいな夕焼けにソまった。
- ⑥ トレーニングのために、池の周りのランニングコースを走った。
- ⑦ 額を付き合わせて、いたずらの相談をする。
- ⑧ 昔は写真を撮った後、フィルムを現像する必要があった。
- ⑨ 国民には納税の義務がある。
- ⑩ 留学から帰国した友人を囲んで、思い出話に花を咲かせた。

問題四

次の①～⑩の文の（ ）に入る最も適当な語を後のア～シから選び、記号で答えなさい。

- ① 今ごろ（ ） やつて来ても遅い。おそ
- ② 知らない人を（ ） 見るな。
- ③ 疑いの気持ちかれが（ ） と湧いてきた。わ
- ④ 彼は（ ） とよく勉強する。
- ⑤ 足元が（ ） しておぼつかない。
- ⑥ （ ） と胃が痛む。
- ⑦ 恐ろしさおそが（ ） と胸に迫る。せま
- ⑧ 母はわたしに（ ） と説教する。
- ⑨ あの人は（ ） 泣いてばかりいる。
- ⑩ つまらぬことで（ ） するのはやめよう。

【語群】

ア	じろじろ	イ	ひしひし	ウ	くどくど	エ	くよくよ	オ	のこのこ
カ	むくむく	キ	もくもく	ク	めそめそ	ケ	よろよろ	コ	きりきり
サ	ぬくぬく	シ	さらさら						

問題五

次の①～⑤の故事成語（昔から今に伝わる中国の話が元になってできた言葉）について、次の設問に答えなさい。

問一 それぞれ後ろの話を読んで、□に入る最も適当な漢字一字を答えなさい。

問二 それぞれの故事成語の意味として最も適当なものを後の【意味】ア～クから選び、記号で答えなさい。

①

□ 面楚歌

項王の軍は、垓下の城壁の中に立てこもった。兵の数は少なく、食料も尽きてしまった。漢の軍勢とそれに味方する諸侯の兵士は、城壁を幾重にも包囲した。ある夜に、漢の軍勢が四方で皆、項王の故郷である楚の歌を歌うのを聞いて、項王は大変驚いて言った。「漢はすでに楚を手中におさめたのだろうか」と。

②

蛇 □

この酒は数人でこれを飲むには少なく、一人で飲むには余りあるほどだ。そこで地面に蛇の絵を描いて、最初に描きあげた者がこの酒を飲むことにしよう、ということになった。やがて一人がまず蛇を描きあげた。その人は酒を引き寄せて今にも飲もうとし、左手にさかずきを持ち、右手で蛇を描きながら言うことには、「俺はこれの足まで描くができるぞ」と。その人がまだ蛇の足を描きあげないうちに、他の一人の蛇が完成し、さかずきを奪い取って言った、「蛇には足がないのに、どうして足なんか描けるものか」と。そう言って酒を飲み干してしまい、蛇の足を書いた人は結局酒を飲むことができなかった。

③

五十歩 □ 歩

孟子が答えて言うことには、「王は戦を好まれます。戦いにたどえて意見させてください。戦いを鼓舞する太鼓が鳴って、兵は武器をもって戦い始めています。そのようなときに、鎧を捨てて逃げ出す兵士がいました。一人は百歩逃げてと

まり、もう一人は五十歩逃げてとまりました。五十歩逃げた人間が、百歩逃げた人を笑ったとしたらどうお感じになりますか？」と。これを聞いた恵王が言うことには、「それはよくない。五十歩逃げた人はただ百歩逃げなかったというだけで、逃げたことにはかわりがないのだから」と。

④

□の威を借りる狐

虎は獣を探して食べて生きていたが、ある日狐を捕まえた。捕まえた狐が言うことには、「あなたは決して私を食べてはいけません。天の神は私を百獣の王にされているからです。今あなたが私を食べたのならば、それは天の神の命令に逆らうことになります。あなたが私の言うことを信用ならないと思うのならば、私はあなたの為に先に歩いてみましょう。あなたは私の後ろについて来て見ていなさい。百獣の王である私の姿を見て、他の獣たちが、どうして逃げないことがありましょうか。いやきつと逃げるはずですよ」と。虎はその通りだと思った。そこでそのまま狐と歩いて行くことにした。獣たちはこの狐の後ろに虎がついて歩いている様子を見て、皆逃げていった。虎は獣たちが自分のことを恐れて逃げたことになったことに気づかなかったのだ。

⑤

□盾

楚の国の人で盾と矛とを売る者がいた。この人が自分の盾のことを誉めて言うことには、「私の盾の頑丈なことといえ、突き通すことができるものはないほどだ」と。また、その矛を誉め言うことには、「私の矛の鋭いことといえば、どんな物でも突き通すことができるものはないほどだ」と。それを聞いていたある人の言うことには、「何でも突き通すことができるあなたの矛で、突き通すことができるものがないあなたの盾を突いたらどうなるのですか」と。その盾と矛を売る人は、答えることができなかった。

【意味】

ア つじつまのあわないこと。筋の通らないこと。

イ 似たり寄ったりであまり違いがないこと。

ウ 争いごとに夢中になっているすきに別のものが利益を得ること。

エ 文章を書いた後、字句を良くするために何度も練り直すこと。

オ ほかの人の権力を後ろ盾にして威張ること。

カ 敵に囲まれて孤立し、助けがないこと。

キ あつても利益にならない余計なもののこと。

ク もう後には引けないという覚悟でものごとにあたること。

(以下余白)

